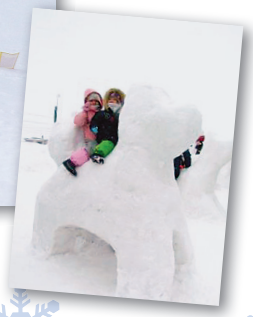
“あつき雪”を楽しもう



第３章

いかして築く歴史と暮らし

この章では、ゆざわの歴史を紹介します。
文献に残された記録だけではなく、
考古遺物（こうこいぶつ）やさまざまな伝承（でんしょう）などもあわせて取り上げ、
ゆざわに住む私たちの生活の歴史を見てみたいと思います。

1. ゆざわの遺跡と当時の暮らし

日本列島に人が住み、生活をはじめたのは10万年以上前だと考えられています。秋田県内においては、3万年前から1万2千年前のものと考えられる旧石器時代後期の遺跡が発見されています。

ゆざわの縄文遺跡

旧高松小前。長蓮寺遺跡の出土状況が再現されている。

岩井堂洞穴遺跡

縄文時代の比較的早い時代の遺跡だとされているのが、上院内にある岩井堂洞窟遺跡です。この洞窟は雄物川の上流にあり、川の侵食によってできた洞穴を住居として使用したものだと考えられています。この洞窟は院内凝灰岩（第1章参照）でできているため、川の流れによる侵食を受けやすかったものと思われます。、また、縄文時代だけではなく弥生時代の遺物も見つかっています。湯沢市では唯一、国指定の史跡として文化財の指定を受けている遺跡です。

皆瀬にも複数の縄文遺跡の存在が確認されていますが、ほとんどが皆瀬川の流域にあります。そこにすむ魚を捕らえたり、水を飲んだりなど、川を利用して生活していたと考えられています。

縄文時代終わりころには布の作成も行われていたようで、布と毛皮とをあわせて身につけ、冬を越したと考えられています。

縄文時代の人々がもっとも早くから食料としていたものに、クリとクルミがあるとされています。岩井堂洞窟遺跡からもこれらのものが見つかっています。そのほかに、カタクリやゼンマイ、ワラビ、ウド、ミズ、コゴミ、ウルイ、ヤマユリなどの山菜も食用されており、現在の私たちと同じように春から初夏にかけて、山菜の採集を行っていたようです。

旧高松小学校敷地内にも、縄文時代の終わり頃のものと考えられている長蓮寺遺跡があります。

稲作のはじまり

縄文時代の終わりにあたる紀元前300年ごろ、大陸から稲とそれを作る技術が北九州にもたらされました。稲作に代表される弥生文化は瞬く間に広がり、本州の北端にまで達したと考えられています。ゆざわでは、岩井堂洞窟遺跡や岩崎の狐崎遺跡などが、弥生時代の遺跡だと考えられています。

男鹿市および宮城県、福島県、青森県の同時代の遺跡から、籾のあとがついた土器片が見つかっており、東北地方にはすでに稲作の技術が広く伝わっていたと考えられています。そのため、岩井堂遺跡や狐崎遺跡でも稲作が行われていたと推測されています。

2. 平安から中世のゆざわ

日本最古の歴史書とされている『古事記』は、712(和銅5)年に成立したものだと考えられています。この後には、さまざまな記録が残されるようになります。

ゆざわを含めた秋田県の大半が属していた出羽国は、この時代に作られたものです。

構森経塚

平安時代のゆざわと信仰

平安時代の遺物が、松岡で見つかっています。それは、松岡坊中の白山の一角、構森から見つかった経筒※1です。

構森からは、二本の経筒が見つかっており、それぞれ、寿永3(1184)年と建久7(1196)年の文字が記されています。また、山頂にある白山神社には、平安時代末期のものと考えられている木造の女神像があります。

※1:経筒は、書写した経を収める筒のことで、鏡・銭・刀などと一緒に埋めたものは、経塚と呼ばれています。経塚は、死者の冥福を祈ったり、病気の治癒を祈願したりするための塚だとされています。

稲庭城と小野寺氏

平安時代に続く、鎌倉・室町時代にゆざわを含む秋田県南部一帯を支配していたのは、小野寺氏でした。小野寺氏は、1184（元暦元）年および1189（文治5）年の戦での活躍により、恩賞として雄勝一帯を賜り、その地に稲庭城を築き、ゆざわに移住してきたとされています。その後、最上氏の一門に滅ぼされ、親子兄弟が石見国（島根県）に流罪になる1601（慶長6）年まで、400年以上、秋田県南部一帯を支配していました。

中世には、ふだんは麓で暮らし、戦争中には山城に立てこもるという考えのもと、山城が多く建築されました。稲庭城のあった場所は、西に山形県の甑山、北に仙北平野、南東に花山峠を望むことができ、三つの方角を良く見ることができる場所でした。そのため、山城を建てる場所として、良い場所だったと考えられています。なお、現在の稲庭城は、1989（平成元）年、二の丸跡に資料館として建築された城です。

再現された稲庭城

小野寺氏と川連漆器

川連漆器の歴史は約800年前にさかのぼり、城主・小野寺氏が武具に漆を塗らせたことから、技術が広まったと伝えられています。大正時代には、すでにこのような説があったようですが、藩に残された記録、地方文書など残された史料から、近世の初期あたりに漆塗りのお椀が作られ始め、農作業がない間の副業として定着したのではないかとする説もあります。

川連漆器

3. 佐竹氏の転封と院内銀山

小野寺氏が石見国に流された翌年、代わりに秋田にやってくることになったのが、佐竹義宣(さたけよしのぶ)です。

院内銀山の発見と佐竹氏

湯沢城址は中央公園として整備されている。

院内銀山史跡・御幸坑

院内銀山は、1596(慶長元)年に発見されたとも、1606(慶長11)年に発見されたとも言われています。いずれにせよ、江戸時代の記録によれば、かなり栄えた鉱山だったようです(第1章参照)。

当時、佐竹氏は常陸水戸(ひたちみと)※2 54万石から出羽秋田(でわあきた)20万石への減転封(げんてんぷう)※3を受けたばかりでした。当然、財政(ざいせい)は厳しい状態にあり、家臣(かしん)を養うために新田(しんでん)や森林の開発とともに、鉱山の開発も積極的に行ったとされています。

藩(はん)が銀山の運営にどの程度力を入れていたのか正確な資料は残されていませんが、おそらく院内銀山にも注目し、開発を進めたものと思われます。また周辺には、銀山で働く人々の需要を満たすために酒屋などが営まれると同時に、銀の精製に用いるための木炭が近隣の山野から供給されたものと思われます。

※2: 現在の茨城県のほとんどが、常陸国でした。
※3: 転封とは、領地の移動を命じられることです。佐竹氏の場合は、転封とともに、領地を減らされたため、減転封となりました。

院内銀山が残したもの

院内銀山は、休山と再開を繰り返しながらも、約350年にわたって採掘が続けられました。院内銀山は、ゆざわに大きな影響を与え、様々なものを残していきました。それは、複数の坑道（こうどう）の入り口や、明治時代にやってきた技術者たちの住居である異人館（いじんかん）の跡地、歴代藩主から多数の奉納物（ほうのうぶつ）があった金山神社など、史跡と呼ばれるものに留まりません。現在、ゆざわで行われている日本酒造りも、もともとは院内銀山の労働者たちの需要（じゅよう）に支えられて発展したものだとされています。

JR 院内駅。異人館を模して作られており、駅舎に隣接して資料館が設置されている。

院内銀山史跡・共葬墓地

院内銀山史跡・金山神社

金山神社・拝殿彫刻

4. 菅江真澄とゆざわ

江戸時代後期になると、政治や事件に関するものだけではなく、一般の人々の生活に関する記録が、各地で残されるようになりました。

ゆざわの人々の生活のようすについては、江戸時代の旅行家・菅江真澄が文字と絵図による記録を残しています。

菅江真澄の描いた大噴湯（秋田県立図書館所蔵マイクロフィルム『菅江真澄遊覧記』より）

菅江真澄とゆざわ

菅江真澄がはじめてゆざわにやってきたのは、1784（天明4）年の末のことでした。故郷の三河国から北上し、信濃国・越後国を経て、出羽国を訪れます。[※4] 現在の山形県の日本海側を通って、由利郡に入り、西馬音内を通って、柳田にやってきました。

菅江真澄の記録は、旅日記からはじまりました。ゆざわに関するものでは、『小野のふるさと』が残されており、小野にある小野小町の旧跡を見て回ったときのようすを記しています。

現在の小安峡

※ 4: 三河国は現在の愛知県の東部、信濃国は長野県、越後国は新潟県のあたりです。

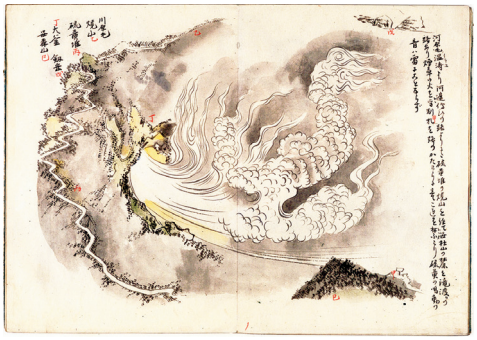
その後、現在の宮城県・岩手県・青森県・北海道の各地をめぐり、1801（享和元）年に再び秋田に戻ってきます。その頃は秋田県の北部を中心に旅を続けていましたが、1811（文化8）年に、秋田藩主・佐竹義和から出羽国各地の地誌[※5]編さんを頼まれたと言われています。

1814（文化11）年、地誌編さんのために再び、ゆざわを含めた雄勝郡にやってきます。その結果作成された地誌が、『雪の出羽路雄勝郡』と『勝地臨亳』（絵図）です。

菅江真澄が描いたゆざわ

菅江真澄は、ゆざわのさまざまな場所に行き、先のような記録を作っています。いまから200年以上も前の記録ですが、現在も同じような風景が見られるところもあります。たとえば、小安峡・大噴湯や秋ノ宮・唐櫃石、高松・川原毛地獄などは、菅江真澄が描いた絵図とほとんど変わらない光景を見ることができます。

人家や街道など人の営みによって作られた景観は大きく変わりましたが、地球の動きによって生まれたこれらの景観は、200年の時を経てもほとんど変わらずに残されています。



菅江真澄の描いた川原毛地獄（秋田県立図書館所蔵マイクロフィルム『菅江真澄遊覧記』より）

現在の川原毛地獄

※5: ある地域の自然や場所、人々の暮らしや歴史などを調べてまとめた記録のことを言います。

5. 近代と交通機関の発達

1867（慶応3）年、第15代将軍・徳川慶喜（とくがわよしのぶ）が大政奉還（たいせいほうかん）をしました。それによって、源頼朝（みなもとのよりとも）以来、長く続いた武士による政治が終わり、再び、天皇を中心とした政治が行われるようになりました。急激な政治状況の転換は、社会に大きな動揺を与えると同時に、日本全国を巻き込んだ争いを生みました。それが幕末（ばくまつ）から明治（めいじ）にかけて起こった戊辰戦争（ぼしんせんそう）です。

その後、明治時代には近代的な交通機関の整備が行われました。特に鉄道の登場は、ゆざわに住む人の生活に大きな影響を与えました。

戊辰戦争

1867（慶応3）年10月15日、徳川慶喜が大政奉還をしました。それによって、江戸幕府は崩壊することになります。しかし幕府の側につく人も、いまだ多く残っていました。東北地方では、新政府軍と幕府側についた奥羽越列藩同盟（おうううえつれっぱんどうめい）との間で、激しい戦闘が繰り広げられました。

戊辰戦争末期、秋田からの退却を余儀なくされた仙台藩（せんだいはん）が、仙台に引き上げる際に邪魔になる大砲（たいほう）や砲弾（ほうだん）を、小安峡の不動滝（ふどうたき）に投げ入れたという話も伝えられています。実際、皆瀬川の水が少なくなった夏には、不動滝の滝つぼから丸い鉄の玉（大砲の玉）が見つかることがあったそうです。※6

砲弾が見つかった不動滝

※6:『皆瀬村史』や『稲川町史』には、戊辰戦争に関する聞き書き資料が掲載されています。

街道の整備と人力車の登場

明治に入り、新しい交通機関がゆざわにも入ってきました。それが人力車です。1890（明治23）年、山田のある代議士が当選したときにはじめて乗り回したと言われています。その後、瞬く間に主要な交通機関となりました。どうやら明治30年代半ばがその最盛期だったようです。当初は鉄車輪（てつしゃりん）の人力車でしたが、1909（明治42）年ごろからゴム車輪に変わったといいます。また、明治期には湯沢から稲川に通じる山谷峠（やまやとうげ）や稲庭から小安に通じる貝沼峠（かいぬまとうげ）、文字越（もんじご）えの改修など、多くの街道が再整備されています。道が広く通りやすいものになったことも後押しとなって、多くの人力車が行き交ったのではないかと思われます。しかし、鉄道の開通によって、人力車はすぐに廃（すた）れてしまいました。

奥羽線（おううせん）の開通

東北における鉄道敷設（ふせつ）は、北は青森方面、南は福島方面から着工されることになりました。秋田県はちょうど中間地点にあたるため、鉄道敷設の最後の部分である上、日清戦争等の社会情勢によって、工事はなかなか進みませんでした。1902（明治35）年には、秋田県内一部区間が起工されましたが、戦時の軍資金供給のため、1905（明治38）年に全線開通という予定を変更して、工事が中止されました。しかし、地元の必死の働きかけにより工事が再開され、1904（明治37）年の9月には奥羽線が全線開通しました。

現在の JR 奥羽本線・湯沢駅

自動車交通と除雪

現在は、除雪車や除雪機の登場にともない、除雪するのが当たり前になりました。皆瀬ではブルドーザーによる除雪が、昭和30年代にはすでにはじまっていました。自動車が普及した結果、道路交通の必要から「除雪」という考え方が生まれてきたのだと思われます。

以前は降った雪を上から踏み固めて、歩く部分だけ道を作るという感覚だったようです。「フミダワラ」と呼ばれる道具などを用いて、その作業が行われていました。

左下のものがフミダワラ。足を入れて使う

交通機関と温泉

このように明治期には、交通機関が急速に発展していきました。このような急速な発展であったためか、すべての地域が同時に近代交通機関を享受できたわけではないようです。ここでは、温泉郷への交通機関の記録を見てみたいと思います。

1894（明治 27）年に発行された秋田県内の温泉を紹介した『秋田県温泉のしるべ』では、各温泉郷の状況とともに、そこに行くための交通手段も記されています。

高松の泥湯温泉は、湯沢町（現在の湯沢市街地）から三途川までは、「平坦にして腕車を通す」とあります。腕車とは、人力車のことです。しかし、そこから先は、「山路渓間にして牛馬を通す」だけであり、「十一月より翌年三月に至るの間殆んと人跡を絶つ」と書かれています。

皆瀬の大湯温泉へは、湯沢方面もしくは増田方面から稲庭を経て向かったようです。「小安湯元まて車馬を通す是より僅に小阪ありと雖も木履を用ふる事可なり」とあります。現在の小安峡温泉のあたりからは徒歩だったようです。

秋ノ宮の湯ノ岱温泉へは、道路の状態は良かったものの細い道であったため、馬車で向かうことは困難だったようです。ただし、「牛馬の往来を通るには易すし」とあります。

交通機関と温泉場の経済

『秋田県温泉のしるべ』では、院内の湯の沢温泉は、「道路は田畦或は山際なるを以て便ならず」と紹介されています。ですが、1911（明治 44）年発行の『秋田県案内』では、「人車鉄道足を労せずして往復せらる暑中臨時の下車駅となり汽車賃も割引せられ県内に於て最も停車場に近き随一の温泉なり」と記されています。先に述べたように、奥羽本線の全線開通が 1904（明治 37）年です。鉄道が通った結果、急激に県内でもっとも交通の便の良い温泉になり、旅客も増えたと考えられます。

そのように劇的な変化をとげた場所もあれば、近代交通機関の恩恵を受けられなかった地域もあります。明治 20 年代の小安温泉は道路事情が悪く、湯治に来る客も田植えの終わり頃から馬が通ることのできる秋までに限られており、宿の経営を行いながら、田畑および山林での仕事を行い、客の荷物を須川温泉まで運ぶ背負子としても働いていたようです。人力で荷物を運ぶ背負子以外にも、馬によって荷物を運ぶことが行われていました。この温泉場に関する運搬の仕事は、明治以前から行われていましたが、特に湯治に向かう人が多くなった明治期には、人々の貴重な現金収入源となっていました。

このように交通機関の発達は、温泉場の経営にも大きな影響を与えていたものと思われます。

6. 雪国の生活

ゆざわは、秋田県や東北地方の各地と比較しても、非常に積雪の多い地域です（第2章参照）。そのため、湯沢市の全体が特別豪雪地帯（ふくべつごうせつちたい）に指定されています。ここでは、大量の雪と付き合う生活のなかで生まれた道具や風習について紹介します。

ゆざわは国内でも有数の豪雪地帯

雪国ならではの輸送法

近代交通機関の発達以前には、自然の力を利用して大量の荷物を運んでいました。たとえば、皆瀬では、皆瀬川を利用した木材の運搬が行われていました。また、積雪を利用した運搬法もありました。真冬から春に変わる季節には、降り積もった雪が、締まり固くなります。その雪上にそりを走らせて、大量の荷物を運んでいました。

雪と文化

現在では、「災害」と言われるほどの雪ですが、それでも私たちは雪と付き合ってきました。除雪だけではなく、雪と関係する様々な文化が生まれました。

たとえば、小正月に行われる雪中田植(せっちゅうたう)えという行事があります。雪の積もった真っ白な田んぼのなかに稲に見立てたわらや豆がらを植えるという行事です。実った稲に見立てたわらや豆がらを田んぼに実らせることで、秋の豊作(ほうさく)を祈る行事です。予祝[※7]のための行為ですが、雪のなかに田植えを行うのは雪国ならではのものです。現在、雪中田植えを行っている地域はなくなったようですが、駒形小学校(こまがたしょうがっこう)では2004(平成16)年から学校の行事として雪中田植えが行われています。

同じく、小正月に食べるものに「ふきどりもち」という食べ物がありました。これはもちに豆の粉をつけたもの、いわゆるきな粉もちです。ゆざわでは、「これを食べると、フキ倒れ(吹雪のなかで倒れること)しない」と言われていました。これも雪に関する呪術的な行為のひとつでした。

また、雪を田植えの目安に使っていた地域もあります。役内地区では、4月になると、神室山(かむろさん)の残雪が、人が種蒔きをしているように見え、それを合図に種蒔きをしたといいます。

※ 7: あらかじめお祝いをすることで、実際の豊作を祈るような行為のこと。

神室山の残雪

駒形小学校で行われている雪中田植え

犬っこまつり

犬っこまつり

犬っこまつりは、毎年2月に行われるお祭りです。現在は、湯沢市観光物産協会と犬っこまつり実行委員会の主催で行われています。「お堂っこ」と呼ばれる雪で作られたお堂の制作・展示を中心に、しん粉細工[※8]の販売などが行われます。

雪を利用したお堂が立ち並ぶ様子は、まさに雪国の祭りにふさわしいものです。現在では、観光客誘致のためのイベントとして行われており、花火の打ち上げや餅つき、犬をテーマにしていることから愛犬祈願祭などが行われています。

この犬っこまつりは、もともとは小正月の行事として各地域で行われていたものを参考に作られています。たとえば、皆瀬では15日の晩は「夜回り」といって、子どもも大人も夜更けまで遊び歩くことが行われていました。その際、留守にする家の留守番として、家の入り口の桟に餅粉で作った犬をあげていたとされています。各家でお堂を作り、その中にうるち米で作った犬や鶴、亀などを飾り、病気をせずに無事に過ごせるように祈っていました。

※8: 米粉を使って作る、小さな飾り物。

現在の犬っこまつりでも、どんど焼き[※9]が行われるなど、小正月行事だった頃の名残がところどころに残されています。

またこのお祭りには、その由来を語る伝説があります。

元和の頃（1615～1624）、白討と称し、白昼堂々と家を襲う盗賊がいましたが、湯沢の殿様が盗賊の一味を見事捕らえました。雄勝では、このときから再び盗賊が現れないようにと、旧暦の小正月の晩に、どこの家でも用心のために、門口などに餅で作った犬や鶴亀などを飾り、子供たちは「用心めぐり」と称して、家々を回るようになったのだと言います。『湯沢市史』によれば、当時、西馬音内には三五郎という盗賊がいて、その下にいた赤袴村の甚十郎という力の強い者が「白討」と名乗っていたことは事実のようです。

小正月に行われていたという「用心めぐり」ですが、それを「鳥追い」と呼ぶ地域もあります。「鳥追い」は、農作物を食い荒らす鳥を追い払い、豊作を祈るまじないだとされています。

昭和52・53年度に、秋田県内の150の集落を対象に行われた調査によれば、鳥追いが秋田県全域で広く行われていた行事であることがわかります。ゆざわでは現在は行われていないようですが、大仙市・北秋田市・上小阿仁村などでは、現在も鳥追いが行われているようです。

元々秋田県内で広く行われていた小正月の行事が、ゆざわにおいては佐竹南家の殿様が行った盗賊退治とあわせて語られるようになったものではないかと思われます。

※ 9: 正月の門松やしめなわ、書初めなどを各家から持ち寄って燃やす行事です。

犬っこまつりで売られているしん粉細工の犬っこ

どんと焼きのようす

7. ゆざわの自然と信仰

信仰の山・東鳥海山

世界中、どの地域においても、またいつの時代においても、わたしたちは何らかの信仰を持ちながら生活をしています。それは神道や仏教、キリスト教といった宗教だけではありません。わたしたちに実りをもたらしてくれる山や川、あるいは路傍(ろぼう)に祀(まつ)られる神など、さまざまなものを信仰の対象としてきました。

山の神と田の神

山の神の信仰は、秋田県内に広く分布しています。秋田県では、山の神と田の神とは同じものだと考えられています。春になると山から下りてきて田の神となり、秋の収穫が終われば山を上り山の神になるという信仰です。山の神の性別については女性神だとする地域が多いのですが、ゆざわを含めた県南部では男性神だとする地域も多いようです。秋田県では、山を守護する神だとされることが多いようですが、県南部ではお産の神様だとする地域も多いようです。

ゆざわで行われていた山の神の祀(まつ)り方は、次のようなものです。役内では2月16日は山の神の日とされ、「山の神が田の神になる日。餅をつき、12個の餅を作り、お神酒とともに神棚に供える。昔は集会所に集まった。山に神様がいないので、山仕事は休む」日だったといいます。また10月16日にも、山の神の日があり、「この日は雪が降るといわれ、神様が雪を降らせて、木の根を雪のなかに隠し、登りやすいようにして山を登っていくといわれている。十月の山登りともいう」と伝えられています。日にちや祀る

方法については多少の差はありますが、稲川や皆瀬、高松、山田でも同様のことが行われていたという記録があります。

東鳥海山と信仰

東鳥海山は、相川にある標高777mの山です。東鳥海山に連なる山地は、約9700万年前の花崗岩類の上を、約2000万年前より後の火山岩などが覆って形成されています。

東鳥海神社は、農業に関する神として、湯沢市内だけでなく、秋田県南部に信仰集団（講中）を持つ神社でした。現在も半夏生の日（新暦7月2日前後）に、祈祷を行っています。そこでは豊作を祈願する神札と虫除け札とが配布されます。虫除けの札は、田の水口に刺したり、たいまつを持ち、鉦を打ち鳴らすことで稲につく虫を追い払う、虫祭り（虫送り）の行事に利用されたりしていました。また、以前は東鳥海山の土を持ち帰り、田にまくことで「良い水が流れてくる」と言われていました。借りた土は、秋の収穫が終わったあとに新米でついた餅と一緒にお返しにいくのが決まりでした。

現在も東鳥海神社では、半夏生の祈祷が行われています。数は少なくなりましたが、エビスダワラの奉納も行われています。

エビスダワラの奉納

2013 年の半夏生祈祷のようす

8. 稲作と文化

現在でも、ゆざわの中心的な産業となっている農業。ゆざわでは、昔から米づくりが盛んでした。

ゆざわをはじめとする奥羽山脈の西側の地域は、比較的稲作に適した気候だといえます。ゆざわでも、長い間稲作が行われてきました。その結果、それにともなう文化も多く残されています。

秋の田の様子

わらを用いた道具

稲作と関係したものとして、わら細工が挙げられます。現在は主にコンバインを用いて収穫作業を行うため、稲わらが残りませんが、以前はわらを使って、草鞋（わらじ）やわらぐつなど日常生活に用いるさまざまなものを作成していました。

これらのものを作るのは、冬の大事な仕事です。秋の収穫の際にとっておいたわらを利用し、農閑期（のうかんき）である冬の間にさまざまな道具を作り、次の春の農作業に備えていました。

わらで作られるのは、日常的に使用する道具ばかりではありませんでした。たとえば、神社の祭礼の際に使用されているエビスダワラも、その大部分がわらで作られています。エビスダワラは、俵を飾り立て、長い棒を取り付け、御輿（みこし）のようにかつぐものです。

豊作の祈願

各種の豊作祈願も、稲作によって形成された文化のひとつだといえるでしょう。今まで紹介してきた雪中田植えや東鳥海山の祈祷のほかにも、害虫を予防するため虫送りや豊作祈願のための綱引きなど、稲作に関わるさまざまな文化があります。

しかし、それらの多くは廃れて忘れ去られようとしています。たしかに、神様頼みの時代ではないのかもしれませんが、これらの風習を「稲作文化」という地域の財産として、後世に伝えていく必要があるのではないでしょうか。

9. 村境を守る人形

ゆざわには、村境にわら人形を立てる風習があります。これは、村に悪いものが入ってこないようにするために行うのだといいます。わら人形を祀る地域は、岩崎、関口、小渕ヶ沢、野中、御返事、三ツ村、長石田、下川原、岩城、飯田、貝沼、藤倉など、湯沢市内に広く分布しています。

わら人形は、わらを主な材料として作られており、定期的に作り替えを行う必要があります。また、わら人形は、俵や縄などの日用品の一部を組み合わせて作られています。そのため高度なわら細工の技術が必要になり、稲作文化のひとつの形でもあります。

水神社内のカシマサマ

岩崎のカシマサマ

岩崎のわら人形は全部で3体あり、いずれも2～3mほどの巨大な人形です。国道13号線沿いに1体、千年公園内にある水神社の境内に2体の人形が祀られています。それぞれ、地域の町内単位で祭祀が行われており、1年に1度、もしくは2度の作り換えが行われています。いずれも「カシマサマ」[※10]と呼ばれています。

岩崎のカシマサマは、千葉県佐倉市にある国立歴史民俗博物館で展示されていたことがあったり、1986（昭和61）年には、アメリカのスミソニアン博物館で行われているフォークライフ・フェスティバル[※11]に参加したりしています。また、2011年には「湯沢市岩崎の鹿嶋まつり」として、秋田県文化財に記録選択[※12]されています。

※10: わら人形の表記については、地域の方が用いている呼称をカタカナ書きで示しています。
※11: 毎年6月から7月にかけて行われるイベントで、世界各地から、その土地にまつわる民族文化が集められ、紹介されています。
※12: 無形の民俗文化財のうち、重要なものについては、記録の作成がされています。

皆瀬のニンギョウサマ

皆瀬では、これらのわら人形は「ニンギョウサマ」と呼ばれています。皆瀬のわら人形の特徴は、石にわらを被せて作成することです。50cmほどの高さの石に、わらの帽子を被せたようすは非常にユーモラスです。これらのわら人形のわらを取り替えることは、衣替えや鹿島祭りと呼ばれていますが、その回数が多いのも特徴です。

皿小屋（さらこや）では数年前まで、年に4回、衣替えを行っていたそうです。衣替えは、ムラゴト（地域の共同作業や村社のお祭りなど）にあわせて行われています。

若畑では、春夏秋の土用（どよう）※13にあわせて衣替えが行われます。若畑に通じる道は3ヶ所あり、1ヶ所には本体が石のものを、残りの2ヶ所にはすべてがわらで作られた人形を祀っています。

なお、稲川のわら人形も本体が石でできた人形です。

羽場のニンギョウサマ

若畑のわらだけで作られた人形

小野のカシマサマ

小野では、三ツ村（みつむら）、御返事（おっぺじ）でそれぞれ、1体ずつのわら人形を祀っています。岩崎のものよりは小型ですが、どちらもわらのみで作られています。御返事の人形は、年に1度の作り換えが行われたあと、地域の若い人たちが人形をかついで地域内を回ります。以前は、三ツ村でもわら人形の巡行が行われていたようですが、現在は行われていません。

また、秋ノ宮の野中でも1.5mほどのわら人形を作り、村のはずれに祀っています。

御返事で行われているカシマサマの巡行

※13: 中国から入ってきた五行（ごぎょう）という思想によって、設けられた期間です。年に四回の季節の変わり目の期間を指します。それぞれの季節に、約18日間あります。

わら人形と道祖神

村はずれにわら人形を祀る風習は、東北日本に広く見られます。このわら人形が少しずつ形を変え、村境などに祀られる道祖神[※14]になったとする説もあります。

ゆざわには、先に挙げたように、さまざまな形式のわら人形が存在します。その一方で、石や木で作られた男根型のものを「サイノカミ」として祀っている地域が、山田や幡野、三関などにあります。これらのものも村のはずれに祀られており、境界を司る神として信仰されていたと思われます。

また、下小野では、当番の家で人間と同じくらいの大きさのわら人形を作り、神官によるお祓いのあと、これを背負って家々を回り、御初穂と灯明を奉納してもらい、ローソクに点火し、雄物川に流して無病息災を祈りました。7月21日にも同様の行事を行っていたという記録もあります。同じような行事が、横堀や高松、山田などでも行われていたようです。

なぜゆざわにおいて、村境に祀られるわら人形が様々な形式で伝わっているのかは明らかになっていません。

※ 14: 村・地域の境や山の入り口などに祀られる神様です。外から訪れるものを遮るものだと信じられています。また、男女の仲を取り持つ神様だと伝えている地域もあります。

三関の道祖神

落合の塞神社

10. ゆざわの伝説

ほかの地域と同様に、ゆざわにも多くの伝説[※15]があります。

しかし、多くの伝説にはそれが実際にあったことであると裏付ける史料がなく、史実(しじつ)として扱うことは難しいものです。ただ、ゆざわに伝わる伝説は、たしかに現代の私たちまで伝えられてきました。

温泉と伝説

温泉の発見に関する伝説では、小安峡温泉に「昔、木こりがたまたま一匹のアオシシ(カモシカ)が、脚の傷を泉に入れて治しているのを見て、この温泉を発見した」という伝説が残されています。動物が利用している様子を見て、温泉を発見したという伝説は、日本各地にあります。全国的に見られるのは、鷺や鶴、鷹などの鳥による発見です。ゆざわでは、秋の宮温泉郷の鷹(たか)の湯(ゆ)が、鷹によって発見された温泉だと言われています。鹿や猪、猿、熊など比較的大型の動物によって発見されたという伝説は、東北地方に多い傾向にあります。

ほかには、行基(ぎょうき)や弘法大師(こうぼうだいし)などの偉人が杖などによって温泉を湧出させる話、神仏のお告げによって温泉を発見する伝説などがあります。いずれも温泉の神秘的な面を強調し、一種の宣伝として伝説を用いたのだろうと考えられています。

小安峡大噴湯

※15:伝説は、人の口から口へと伝えられてきた物語の形式のひとつです。同様に口伝されてきたものに、昔話や世間話があります。昔話と伝説とを比較したときに、昔話が時間や場所を特定しないことに対して、伝説は時間や場所がはっきりとしていることが特徴として挙げられます。

坂上田村麻呂と伝説

ゆざわに伝わる伝説のなかで、もっとも古い時代を舞台にしているのが、坂上田村麻呂に関する伝説です。田村麻呂は、奈良時代から平安時代にかけて活躍した武人であり、蝦夷の討伐で名を挙げたことで有名です。その活躍が広く知られていることから、寺社の建立、鬼や盗賊の退治など、さまざまな伝説のなかに田村麻呂が登場します。蝦夷の討伐という史実に基づくためか、特に東北地方に多くの伝説が残されています。

ゆざわでは、松岡の白山神社や相川の東鳥海神社などが、田村麻呂の建立したものだと伝えられています。

延暦年間、北部から鬼が押し寄せてきて、悪行を働いていたと言われています。鬼たちは、それぞれの地方に砦を築き、互いに競い合っていました。阿黒王もそのうちの一人だと言われています。阿黒王は、松岡の切畑にある阿黒岩のあたりに砦を築いていました。

鬼たちの横暴を見かねて、派遣されたのが、田村麻呂です。その進軍の際に、兵たちの士気を上げるために、東鳥海山や神室山などに神社を築きました。そして、阿黒王の住む松岡までやってくると、勝利を祈るために白山でも神を祀ったと言われています。

松岡の阿黒岩

小野小町の伝説

平安時代を舞台にした伝説に、小野小町の伝説があります。平安時代の女流歌人・小野小町。その出生地が小野であるという伝承です。※16

ゆざわに伝わる小野小町伝説は、文献によって細かい部分が異なって伝えられています。ここでは、菅江真澄の記したものを要約して紹介します。

「そのむかし、出羽の郡司として小野良実が、小野郷にやってきました。良実は、桐木田というところに屋敷を構えていました。

また小野には、どこからか流されてきた町田治郎左衛門尉為長という人の子孫・町田長左衛門為邦という人が住んでいました。この町田為邦に、ゆかり姫という娘がいました。

※16:小野小町に関する伝説は日本各地にあり、その中でも数が多いのが出生地に関する伝承です。

小野小町を祀っている小町堂

小野小町の産湯に使われたとされている桐木田の井戸

良実は、正式な形ではなかったもののゆかり姫を自分の妻にしました。ゆかり姫はいつの間にか子どもを授かっていましたが、そうしているうちに、良実は郡司（ぐんじ）としての任務を終えて、京都に帰ってしまいました。

ゆかり姫はひとりの女の子を産みますが、女の子を産んで7日が経つと亡くなってしまいます。残された女の子は、ゆかり姫の父母によって育てられました。その女の子こそ、のちに宮中で名を知られることになる小野小町です。

小町は13歳のとき、菩提寺（ぼだいじ）で母親の供養を行いました。そこで母の遺言に従い、育ての親で祖父にあたる為邦が守り太刀の袋を小町に渡します。それを開いてみると、「父　小野良実」と記されていたのでした。自分の父が小野良実であると知った小町は、京の都に対する憧れが募るとともに、いまだ目にしたことのない本当の父を恋しく思いました。そのうちに、人に連れられて京都に上っていくことになります」

ゆざわの小野小町伝説の特徴は、一度、京都に上った小町が、再び故郷に戻ってくることにあると言われていますが、小町の帰郷については取り上げている文献とそうでないものがあります。そのほかにも、小野小町に関する挿話が複数あります。ゆざわの小町伝承は、さまざまな短い挿話が追加され、あるいは忘れられながら、伝承されてきたと考えられています。

これらの伝承がいつ生まれたのか確かなことはわかりません。ですが、文献にはじめて登場するのは、江戸時代になってからのことだと言われています。小町と深草少将の墓であるという伝承のある二ツ森に関する記述が、1698（元禄11）年に成立した『奥羽永慶軍記（おうえいけいぐんき）』※17 に記されており、これがもっとも古い文献だと言われています。

※17：横堀出身の戸部正直が書いた、各地の伝承をもとに編まれた軍記物語です。

小町まつり

小野では、6月に「小町まつり」というイベントが行われています。小町まつりは、小野小町を祀っている小町堂で行われ、本祭に加えて前夜祭も行われており、多くの人でにぎわいます。また、小野小町と深草少将との恋の かけひきの再現などが行われています。

この小町まつりは、もともと小町堂の祭典として行われていたものでした。1953（昭和28）年、旧・小町堂が建立され、第一回目の祭典が小野小町遺跡保存会の主催で行われました。その後、1967（昭和42）年には祭典を盛り上げる七人の「小町娘」の誕生、1975（昭和53）年、保存会から雄勝町観光協会への主催者の変更、1987（昭和62）年「小町太鼓」の制作、1988（昭和63）年、前夜祭が正式実施されるようになるなど、さまざまな変化を経て、現在も続けられています。

ゆざわの小野小町伝承の特徴は、このように現在においても伝説を中心として、さまざまなものが生み出され続けていることではないでしょうか。

小町まつりの様子

能恵姫伝承

稲川と岩崎には、「能恵姫」にまつわる伝承が伝えられています。

能恵姫は岩崎城主・藤原道高の娘であり、美しい姫であったといいます。能恵姫は、増田城主・土肥道近の仲立ちによって、川連城主の若殿・小野寺桂之助と結婚することになります。お輿入れの日、姫を乗せた船が皆瀬川の中ほどの栄が淵にさしかかると、急に荒天になり、大きな竜巻が起きて、船も姫が乗ったかごも見えなくなってしまったといいます。その後、姫にゆかりのある法印の前に現れた能恵姫は、自分が龍神にさらわれたことを遠まわしに伝え、桂之助に形見の品を送るというあらすじです。

東成瀬村に伝わる伝説では、能恵姫がさらわれた後のことも語られています。

能恵姫と龍神は、何年か栄が淵で暮らしましたが、大倉村の鉱毒が流れてきて、住むことができなくなりました。そのため、上流に向かい、小安の不動の滝にたどり着きました。そこに住もうとしましたが、前から住んでいる主がいたので、やはり住むことができませんでした。さらにさかのぼって行き、仁郷の赤滝にたどり着き、そこに安住したそうです。そのため、赤滝のほとりにお堂を建て、「赤滝神社」として能恵姫を祀っているそうです。

のちに能恵姫の供養のために、桂之助が建立したのが、川連の根岸にある龍泉寺だと言われています。能恵姫の形見の品は、龍泉寺の宝物とされてきましたが、数度の火災によって焼けてしまい、いまは残されていないそうです。

千年公園にある能恵姫の像

11. 郷土を伝える運動

ジオパーク活動は、広い意味での地域おこし活動です。ゆざわジオパークは、2012年に日本ジオパークに認定され、現在は世界ジオパークを目指して活動を続けています。ここでは、ジオパーク活動によって起こったゆざわの変化について取り上げます。

院内採石場跡の整備

院内石は、現在、商業利用のための採石は行われていませんが、採石場の跡地がいくつかあります。そのうちのひとつが上院内にありますが、以前は雑木や下草によっておおわれ、見学に行くことが難しい場所でした。

見学しやすいように整備された採石場跡

しかし、院内地域づくり協議会によって少しずつ整備され、現在は誰でも見学に行くことができる場所になっています。その結果、ジオツアーや各学校の課外授業など、さまざまな機会に見学される場所となっています。

院内採石場の例では、学術的な調査によって地域にあるものが再発見され、それをもとに教育や観光への活用がされています。

押切伸・三途川化石資料室

旧高松小学校は、廃校になったあと、1階部分は高松地区センターとして活用されています。2階には、三途川地域から採集した化石や、湯沢の大地の歴史を学べる展示を行う「押切伸[※18]・三途川化石資料室」があります。

化石資料室には、多くの見学者が訪れている

※18: 押切伸さんは、長年、湯沢市の高校で地学の教諭をしていました。そのかたわらで、40年以上かけて三途川層の化石を収集・研究していました。資料室にある化石の多くは、押切さんから寄贈されたものです。